

# 『分別と多感』—金銭、階級と結婚を考える—

## — A Consideration of Money, Class and Marriage in *Sense and Sensibility* —

松原典子

Noriko Matsubara

### 要 約

ジェイン・オースティンは紙幣の顔である。イギリス文学を代表する女流作家としてである。彼女の特徴は優れた写実にある。拙論では処女作である長編小説『分別と多感』をテキストとし、18世紀末から19世紀初頭のイギリス社会における結婚と、それに伴う金銭・階級を検証する。

200年たった今、当時(1811年)の£を2023年の£と¥に換算できた。これにより、「上位階級」つまりアッパー・ミドル・クラスとアッパー・クラスの金銭感覚や相続が理解できた。『分別と多感』の描写の写実から可能となったのだ。ただ疑問と思える描写もある。その写実は、オースティンの人生経験から生まれたと理解した。彼女の人生の大部分がイングランド南部中心という限られた世界、つまり行動半径が狭かったからだと判断できる。その中で結婚にまつわる金銭と階級、そして時代を理解できたことは、やはりイギリスが誇る写実のジェイン・オースティンの真骨頂のおかげである。

キーワード：結婚、階級、金銭、写実(的・性)

### I. はじめに

ジェイン・オースティン(Jane Austen, 1775-1817)が幼少期から創作した作品は「習作」(Juvenilia)として分類され、その一つに書簡体の形式をとる「エリナーとメアリアン」(*Elinor and Marianne*, 1795)がある。『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811)は「エリナーとメアリアン」が書き換えられ、彼女の6つの長編小説の中で最初に世に出た。

ところで、彼女の生きた18世紀末は、理性から感情重視への過渡期である。『分別と多感』ではダッシュウッド家の二人の姉妹、エリナー(Elinor)とメアリアン(Marianne)に理性と多感が描出される。当時の未婚女性の重大事である結婚は家、金銭、階級と密接な関係を持つと考えられる。『分別と多感』に描出される心理とその周辺社会を、結婚を軸として金銭、階級に重きを

置いて読み解いていく。

ここで、彼女の家族についてである。父のジョージ・オースティン(George)はイギリス国教会牧師で男子寄宿学校を経営し、長兄のジェイムズ(James)と4兄のヘンリー(Henry)はオックスフォード大学に学び、5兄のフランシス(Francis)と弟のチャールズ(Charles)は海軍提督に昇進した。教育程度の高い家庭に育ったジェインは姉カサンドラ(Cassandra)と揃ってオックスフォード(Oxford)、サウサンプトン(Southampton)、レディング(Reading)の女子寄宿学校で学んだ。また、父の寄宿学校の蔵書を読み漁り、豊富な知識を持ち合わせていた。3兄のエドワードが裕福な家の養子(Edward Austen Knight)になっていたため、父の死後もジェインは不自由なく生活できた。さらに、4兄のヘンリーの尽力でトマス・エジャートン

(Thomas Egerton) から伝統的イギリス長編小説の三巻本ノヴェル (Novel) の体裁で出版でき、彼女は140ポンドを得た。

## II. 『分別と多感』を読む前に

2017年、イングランド銀行はジェインの肖像が描かれた10ポンド紙幣を発行した。過去には、文豪のウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の20ポンド札 (1970年発行) やチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の10ポンド札 (1992年発行)、またフローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) の10ポンド札 (1975年発行) が知られている。日本でも紫式部 (970年代-1019?), 樋口一葉 (1872-96), そして2024年には津田梅子 (1864-1929), 澁澤栄一 (1840-1931), 北里柴三郎 (1853-1931) の新札が出る。

ここでジェイン・オースティンの評価について示しておく。彼女の写実性について異論を唱える者はなく、英米文学史の中では当然であり、現代にいたる多くの女性作家の先駆者である。日本では夏目漱石 (1867-1916) が『文学論』(1909) に著したものが最も古いとされている。

Jane Austen は写実の<sup>たいと</sup>泰斗なり。平凡にして活躍せる文字を草して技神に入るの点において、優に<sup>しゅび</sup>首眉 (ひげとまず、男子のこと) の大家を凌ぐ。余いう。Austen を<sup>しょうがん</sup>賞翫するあたわざるものはついに写実の妙味を解しあたわざるものなりと。(講談社217, 岩波284)

また、『分別と多感』の中の後半で、メアリアンが病に倒れた場面については次のように著している。

Austen は写実家なり。写実家としての Austen がこの少女 (メアリアン, 拙著者提示) の<sup>げいご</sup>囁語をいかに利用せるかを説くにあって、類似の場合における浪漫派の態

度を説くの便宜なるべきを信ず。(講談社230, 岩波290)

漱石の評価はジェイン・オースティンの写実の素晴らしさを教えてくれる。当時のイギリス社会が人間模様と絡みながら写実的に描かれている。つまり『分別と多感』での結婚が、階級と金銭問題と関わりながら写実的に描かれているといえる。

ところで、『分別と多感』は1811年の秋 (10月末か11月) に出版されたが、題扉には「ある婦人による」(BY A LADY) と記載があるだけで、ジェイン・オースティン作と知られることはなかった。また、ヒロインたちの母ダッシュウッド夫人は「ミセス・ダッシュウッド」(Mrs. Dashwood), ほかに〇〇夫人と紹介される彼女達のファースト・ネームは示されず、家の従属物と思われかねない。つまり、父権制下の時代を彷彿させる『分別と多感』の写実は18世紀末のイギリス社会を映し出しているといえる。

## III. 主な家系と人物

### 3-1. ダッシュウッド家

ダッシュウッド家はイングランド南東部サセックス州 (Sussex) のノーランド (Norland estate: 所有地と屋敷全ての名称) にノーランド・パーク (Norland Park: 屋敷の名称) を構える名門である。ヒロインたちの父ヘンリー・ダッシュウッド (Henry Dashwood) は、生涯独身を通した先代の甥で、乞われてノーランド・パークで同居する。当然、ヘンリーはノーランドすべての所有地と屋敷の法定相続人である。ヘンリーは先妻との間にジョン (John Dashwood) を儲け、後妻のダッシュウッド夫人と3人の娘と平穏な毎日を過ごしていた。ジョンがいつごろノーランド・パークを離れたのか、母の死後からなのか、父の再婚後なのか、自身の結婚による独立なのかは描かれていない。第1章でのジョンの紹介は、実母の遺産の半分を成年に達した時点で相続し、ファニー (Fanny Dashwood, 旧姓フェラーズ Ferrars) との結婚で、彼女の持参金により、さ

らに裕福な家庭を築いていることぐらいである。  
(1, 7-8)<sup>1</sup>

The family of Dashwood had been long settled in Sussex. Their estate was large, and their residence was at Norland Park ... . The late owner of this estate was a single man ... . He invited and received into his house the family of his nephew Mr. Henry Dashwood, the legal inheritor of the Norland estate, and the person to whom he intended to bequeath it.

By a former marriage, Mr. Henry Dashwood had one son: by his present lady, three daughters. The son, a steady respectable young man, was amply provided for by the fortune of his mother, which had been large, and half of which devolved on him on his coming of age ... . By his own marriage, likewise, which happened soon afterwards, he added to his wealth. His wife had something considerable at present and something still more to expect hereafter from her mother, ... (I, 1, 5)<sup>2</sup>

伯父の遺言状には、ダッシュウッド家の財産はヘンリーからジョンへ、さらにジョンの息子、4歳のハリー (Harry) へ相続、と明記されていた。つまり、ヘンリーの相続分はそのままの状態でジョンと次の代へという「長子限嗣相続」の形がとられ、先代と同居する3姉妹には各自1,000ポンド遺贈 (p. 8)、と記載されていた。

... to his son, and his son's son, a child of four years old, it was secured, ... as a mark of his affection for the three girls, he left them a thousand pounds a-piece. (I, 1, 6)

落胆したヘンリーだったが、今後は地代収入などで蓄えができると期待した。もともと、ダッ

シュウッド夫人は財産ゼロだし、ヘンリーが自由にできる財産はわずか7,000ポンドに過ぎず、先妻の遺産の半分はヘンリーの遺産としてジョンへ相続されるので、妻と3姉妹への遺産は、「生涯権」つまり彼が伯父から相続した財産から生ずる利益を一代限り享受できるものだけだった (1, 8-9)。そのため、未亡人となったダッシュウッド夫人と3姉妹はヘンリーの遺産7,000ポンドと伯父から遺贈された3,000ポンドの計10,000ポンドであった (1, 9)。このヘンリーの遺産7,000ポンドの出所は全く描出されていない。可能性としては、ヘンリーが乞われて当主になる以前、実家での相続を経験し、7,000ポンドを得ていたのではないかと想像できる。もちろん、ダッシュウッド家の限嗣相続者となったことから、実家では長子でないことは容易に想像でき、7,000ポンドは実家の相続時の遺贈と考えられる。

... their (Elinor, Marianne, Margaret) father only seven thousand pounds in his own disposal; for the remaining moiety of his first wife's fortune was also secured to her child, and he had only a life interest in it. (I, 1, 6)

... ten thousand pounds, including the late legacies, was all that remained for his widow and daughters. (I, 1, 6)

先妻の遺産の半分はヘンリーの遺産としてジョンへ相続されるので、彼の妻と3姉妹への遺産は、「生涯権」つまり彼が伯父から相続した財産から生ずる利益を一代限り享受できるものだけだった (1, 8-9)。

ダッシュウッド家の当主となったジョンは父ヘンリーの遺言を守り、義母と妹たちの面倒を見るつもりでいたが、妻ファニーの反対にあい、義妹たちに1,000ポンドずつ分けようとするが、最終的には時々50ポンドを義母一家にあげることに落ち着いた。(1, 15-19)

... he meditated within himself to increase the fortunes of his sisters by the present of thousand pounds a-piece ... (I, 1, 7)

At present of fifty pounds, now and then. (I, 2, 12)

新たな当主の妻として横柄に振る舞うファニーに我慢のできないダッシュウッド夫人は3人の娘を連れ、遠縁のサー・ジョン・ミドルトン (Sir John Middleton) の助けを得、彼の住まいがあるデヴォンシャー (Devonshire) のバートン・コテージ (Barton Cottage) に移る。

## 2-2. フェラーズ家

ダッシュウッド夫人一家をノーランドから追い出し、新たなダッシュウッド家の当主となったジョンの妻ファニーの実家がフェラーズ家である。

フェラーズ家の当主はファニーの弟のエドワード (Edward Ferrars) であるが、実権は母のフェラーズ夫人 (Mrs. Ferrars 名前は出ていない) が握っていた。エドワードには弟のロバート (Robert) がいる。当然ながら、母の長子限嗣相続者のエドワードに対する期待は強すぎるほどである。

ファニーは金銭欲の強い「心の狭い自己中心的」(1, 10) 人物であるが、エドワードは内気で実直な青年で、母と姉から政治家へと期待される。しかし、彼はその意向を無視し、牧師になることを望んでいる。ダッシュウッド夫人にとっては自分たちを追い出した張本人のファニーの弟であるが、姉と性格や行動が正反対であることから好意的に接し、バートン・コテージに移住後も厚遇する。

ロバートは母や姉から期待されることもない存在の薄い人物である。彼は守銭奴でありながら散財癖があり、性格的にもいけ好かない男で、最終場面でのどんでん返しの張本人である。エドワードにとってはそれが功を奏して夢が実現できるのである。

## 2-3. エリナーとメアリアンを取り巻く男性

ブランドン大佐 (Colonel Brandon) とウィロビー (Mr. Willoughby) がダッシュウッド姉妹に関わる男性として登場する。

ブランドン大佐はサー・ジョン・ミドルトンの古くからの友人で、エリナーは風貌以外に、紳士的な態度に好印象を持ち、互いに信頼できる友人として接する。しかし、メアリアンは中年の落ち着いた大佐の態度が気に入らない。大佐は35歳、大佐とダッシュウッド夫人とはわずか5歳しか違わない。

妹のマーガレット (Margarette) とバートンの丘に出かけ、急な雨の中、転び足を挫いたメアリアンを偶然助けたのがウィロビーである。ハンサムで快活で、毎日見舞いに訪れる彼にメアリアンは惹き付けられ、周囲の誰もが相思相愛と認めるほど親密な関係になる。その行動を、分別があり道義心も持ち合わせるエリナーは心配し、明るいながらも軽薄そうで実態の見えないウィロビーを見るにつけ、一層ブランドン大佐を信頼する。

## IV. 結婚をめぐる男女と金銭問題

エリナーとメアリアン以外の女性たちにとって、結婚は人生最大の問題である。結婚の条件となる家(階級)に付随する問題点もオースティンは写實的(拙者傍点)に描いている。そこで、金銭描写を織り込みながら考察を続ける。

まず、ヘンリー・ダッシュウッドの遺産、そしてダッシュウッド夫人一家の金銭と結婚についてである。

ダッシュウッド夫人一家が受け取ったのは、一家に7,000ポンドと3姉妹への3,000ポンドの計10,000ポンドである。ジョンとファニーの夫婦の会話から、10,000ポンドに対する毎月の利息が50ポンドであるので、年600ポンドの収入となり、3姉妹が母への食費を差し引きすると500ポンドと描かれている (2, 15-19)。

Do but consider, my dear Mr. Dashwood, how excessively comfortable your mother-

in-law and her daughters may live on the interest of seven thousand pounds, besides the thousand pounds belonging to each of the girls, which brings them in fifty pounds a year a-piece, ... they will pay their mother for their board out of it. Altogether, they will have five hundreds a year amongst them, ... (I, 2, 13-14)

ついに、ダッシュウッド夫人は3人の娘とノーランド・パークを離れる決心をし、デヴォン州のバートン・パークの所有者である遠縁のサー・ジョン・ミドルトンからバートン・コテッジを1年契約で借りる。これをきっかけに夫ヘンリーの残した馬の何頭かを売り、馬車を処分し、召使もメイド二人と下男一人に減らし、手狭なコテッジの修繕と改築経費を計算し、年明け頃に取り掛かろうと計画する。しかし、ダッシュウッド夫人にとって、年収500ポンドでどのような生活が送れるのか、全く理解できていない(6, 44)。

... all these alterations could be made from the savings of an income of five hundred a year ... (I, 1, 31)

ところで、サー・ジョン・ミドルトンは「サー」の称号を持つことから貴族階級ではないが、そのすぐ下の階級に属す一代限りの準男爵である。彼はダッシュウッド夫人一家に馬車の提供や、領地で取れた野菜や肉など食料品、さらに新聞<sup>3</sup>を毎日届けさせる。当時、上位の階級のみが新聞を購読していた事実から、サー・ミドルトン家に繋がるダッシュウッド夫人の出自はアッパー・ミドルクラスかそれ以上だろう。

さて、サー・ジョン・ミドルトン家の妻(Lady Middleton, 名は記されず、レディ・ミドルトンと呼称)の母、ジェニングズ夫人(Mrs. Jennings)は度々ミドルトン家を訪れる。ジェニングズ夫人は、莫大な寡婦給付金(夫の死後、妻の所有に帰すように定められた土地財産)を持

つ未亡人で、娘の家でのパーティには必ず顔を出し、近隣の縁結びに余念がない(8, 52)。ジェニングズ夫人が気にかける人物は、サー・ジョンの親友ブランドン大佐で、夫人はさっそく大佐がメアリアンに恋していると断言する。しかし、17歳<sup>4</sup>のメアリアンにとって35歳の大佐は全く眼中にない。

さて、バートン・コテッジはノーランド・パークに匹敵するサー・ジョンの所有地バートン・パークの一角にあり、あたりは小高いなだらかな丘が続く(7, 47) 広大な敷地である。ここで恋と結婚の写実的描写が始まる。メアリアンは妹のマーガレットと晴れ間を塗って散歩に出かけ、急な雨に遭い足を挫く。偶然、一人の紳士がメアリアンを助け起こしコテッジまで運ぶ。ダッシュウッド夫人とエリナーは突然のことに驚くが、彼の気品のある声と言葉使い、美男子ぶりに一目で気に入る。彼はバートン谷から分かれたアレナム谷(valley of Allenham)に住むウィロビーと名乗る(pp. 58-61)。彼はアレナム村(Allenham)に家も土地も所有していないが、親戚のアレナム・コート(Allenham Court)という屋敷に住む老婦人ミセス・スミス(Mrs. Smith)の財産をいずれ相続するらしい<sup>5</sup>とサー・ジョンが説明する。さらに、サマセット州(Somersetshire)に小さな家屋敷を所有しているという情報もある(9, 62-64)。サー・ジョン主催の舞踏会で、ウィロビーが午後8時から翌朝4時まで踊り続け、8時には馬で狩猟に出かけるなど疲れを知らぬ若さ溢れる青年でもある。メアリアンとウィロビーは長年の知人のように親しくなり、会う度に無上の喜びを感じる(10, 69)。

ノーランド・パーク時代、ファニーの弟エドワードを気に入っていたダッシュウッド夫人だが、ウィロビーは非の打ち所がない、いずれはメアリアンの結婚相手にと願う。ダッシュウッド夫人は娘の相手が誰であれ、財産目当ての結婚を願うことは全くなかった(10, 70)。サー・ジョンが舞踏会を催すたびにウィロビーは招待され、ダッシュウッド家と親密さを増していく。ウィロビー

がメアリアンの振る舞いに事あるごとに賛辞を送る姿を見て、エリナーは二人が愛し合っていると思うが、少々目立たないように自制すべきだと注意する。メアリアンは隠し立てをしたり、感情を抑制することは、理性が抑圧されることだと反論する。二人だけの世界に没入する姿は物笑いの種になるが全く意に閑せずで(11, 75-76)、その姿をブランドン大佐は「妹さんは、二度目の恋愛を認めないでしょうね。」(11, 79)と不可思議な言葉を発する。メアリアンはウィロビーにとって二度目の恋の対象者なのか。ウィロビーは彼女を弄んでいるだけなのか。大佐はなぜ未来を予測できるのか。意気投合するメアリアンとウィロビーは、若さと元気さに欠けるブランドン大佐に偏見を持ち過小評価する。一方、エリナーは尊敬され良識ある人物で、育ちがよく知識を持つ教養人で、さらに穏やかで心の優しい人物だと評す(10, 72-74)。

メアリアンとウィロビーが周囲から秘密の婚約をしているのではないかと疑われる根拠は、メアリアンがウィロビーから馬をもらう事実を最大限の喜びでエリナーに話したり(p.83-85)、ブランドン大佐主催の遠出の計画が急遽取りやめになった時、二人だけでスミス夫人不在のアレナム・パークに出かけ、帰宅後、ウィロビーとの将来を想像しながら見栄えがしない部屋も200ポンドもかければイングランド有数の夏の部屋になるとエリナーに語る(13, 99)からである。スミス夫人の遺産を相続すると噂されているが、ウィロビーは経済的にすでに独立し、年6,700ポンドくらいの地代収入を得ているようだが、収入以上の生活ぶりで経済的苦しさをこぼす(14, 102)。

... though Willoughby was independent ... about six or seven hundred a year; but he lived at an expense to which that income could hardly be equal, and he had himself often complained of his poverty. (I, 14, 72)

突如、ウィロビーはスミス夫人からロンドン行

きを命じられる。ダッシュウッド夫人は財産のないメアリアンをスミス夫人が認めることができず、彼女の意に叶う結婚相手を見つけるのではないかと勘繰る(15, 111)。

入れ替わりにエドワードがバートン・コテッジを訪れる。彼が語る将来は、世間一般同様に幸せになりたいが、出世イコール幸せではない、というものである。エリナーとメアリアンも対立する。「普通に生活できるお金」の捉え方に大きな隔りがある。メアリアンの答えは「年収1,800ポンドから2,000ポンド」。対するエリナーは「年収1,000ポンド」。メアリアンの根拠は召使が数名、馬車が1台か2台、猟犬が数匹なので2,000ポンド以下では無理というのである(17, 128-129)。

“About eighteen hundred or two thousand a year ...”

Elinor laughed, “Two thousand a year! One is my wealth!...” ...

“And yet two thousand a year is a very moderate income,” said Marianne. “A family cannot well be maintained on a smaller. I am sure I am not extravagant in my demands. A proper establishment of servants, a carriage, perhaps two, and hunters, cannot be supported on less.” (I, 17, 90)

猟犬の必要性にエドワードが口をはさむ。金のかかる生活を快適と捉える見栄っ張りでない堅実な人物といえる。

彼はダッシュウッド家に一週間ほど滞在するが、元気がなく、言動に率直さが欠ける。エリナーは彼が経済的に独立できず、実権を握る母親のフェラーズ夫人の性格と意向によるもの、つまり親子で将来の進路が異なり、母親の意に沿う行動と義務に悩んでいると考える。牧師を希望する息子の意向を無視し、軍人、あるいは紳士の職業として弁護士への道を強要し、将来的に政治家を期待する母、そして姉。一般に、アッパー・ミッド

ル・クラスの「ヤンガー・サン」つまり次男以下の息子が就く職業は「専門的職業」(professions)で、特に陸軍の士官(陸軍の地位はかなりの高額で購入しなければならなかった)、外交官、英国国教会の聖職、法廷弁護士(barrister)がある。フェラーズ夫人はなぜ聖職者を嫌悪するのか。牧師補や牧師はミドル・クラスに属すが、いずれアッパー・ミドル・クラスに属することも可能である。ちなみにエリザベス女王の国葬やチャールズ3世の戴冠式を執り行ったカンタベリー大主教や主教まで上り詰めればフェラーズ夫人とて満足だろう。弁護士も法廷弁護士と事務弁護士に分かれる。法廷弁護士ならともかく事務弁護士では階級は下がるので、母の期待は法廷弁護士だろう。いずれにせよフェラーズ家の長子限嗣相続者であるエドワードは最低限アッパー・ミドル・クラスを維持できるはずである。

ここでダッシュウッド姉妹以外の二人の女性を追ってみる。ダッシュウッド夫人の親戚でパートナー・コテッジの所有者であるサー・ジョン・ミドルトンの妻の実家ジェニンズ夫人の遠縁にあたるスティール姉妹(Miss Steeles)、姉のアン(Anne)と妹のルーシー(Lucy)である。物語で活躍するのは、優雅さや気品に欠けるが人目を惹く容姿のルーシーである(21, 168)。スティール姉妹の他人への機嫌取りにメアリアンは辟易し、そのためエリナーが礼儀上の嘘をつく役目を果すしかない。無礼、下品、無能なスティール姉妹にメアリアンは我慢できない(22, 178)からだ。また、頭のよさそうに振る舞うルーシーだが、実は無知で無教養だとエリナーは見抜き、それが知的訓練不足と常識的知識不足によるものだと理解し気の毒に思う(22, 178)。さらにルーシーの繊細さと正直さと誠実さの欠如に対し、自分とは対等な会話は不可能だ(22, 179)とかなり辛らつである。そのルーシーの告白にエリナーは驚愕する。ルーシーはエドワードと4年前から秘密の婚約をしている(22, 181-82)のである。

秘密の婚約と言えば、メアリアンとウィロビーが思い浮かぶ。しかし、ルーシーとエドワード

の秘密の婚約は事実であり、エリナーの知るエドワードからは全く想像できない。彼の元気のなさは、若気の至りで秘密の婚約をしてしまったこと。正直で一本気さが婚約の破棄を不可能にしているとエリナーは考える。当時、イギリスでは女性から破棄することは可能だったが、男性からの破棄は問題視された。つまり、エドワードとエリナーのノーランド・パークでの時間は、彼にとって二度目の恋愛というわけである。彼はルーシーの本質を見抜いたが、エリナーに対する感情を押し殺さざるを得ない状況で、彼女の前から姿を消したのである。「二度目の恋」と知ったエリナーの胸中はいかなるものなのか。一方、ルーシーはエドワードの二度目の恋の対象がエリナーと知ってか知らずか、自分たちの秘密の婚約をエリナーに語る。エドワードは2,000ポンドしか持っていないので結婚そのものが無茶であり、後ろ盾もなく財産もない自分と結婚すれば、彼が貰えるはずの財産をふいにさせることになる。秘密の婚約から4年経つが、八方ふさがりの状況なので婚約解消したほうがいいのか、とエリナーに尋ねながらも、何年かかろうと待つと語る(23, 201)。

“He has only two thousands pounds of his own ... . I love him too well to be the selfish means of robbing him, perhaps, of all that his mother might give him if he married to please her. (II, 2, 141)

エリナーは4年も秘密を守り通しているエドワードを倫理的に認め、ルーシーへの愛がすでにないからこそ悩み、結婚しても幸せになれる可能性はないと判断する。しかも、ルーシーには真実の愛がなく、エドワードの愛が冷めているのに婚約で縛り付けているのは、彼女の利己心以外何物でもない、と自分を納得させる(24, 206-07)。

1月末、エリナーとメアリアンはジェニンズ夫人の誘いを断り切れず、ロンドンへ旅立つ。デヴォン州からロンドンまで馬車で3日の旅程である。到着後すぐにメアリアンは手紙を書き、2

ペンス郵便<sup>6</sup>を従僕に頼む。エリナーは1日に4から8回ほどの集配達があるロンドン市内郵便と直感し、ウィロビー宛だと確信する (p. 220).

Marianne ... to the two-penny post. (II, 4, 154)

しかし、ロンドンにいるはずのウィロビーから全く音沙汰がない。

社交界に顔の利くジェニングズ夫人の誘いで、エリナーとメアリアンはパーティに出かけウィロビーを見かける。しかし、ウィロビーには連れの女性がいる。彼はエリナーには挨拶するが、メアリアンは苦痛の対象だった。恋が成就する間際なのだ (28, 244)。ようやく届いたウィロビーからの手紙には、ダッシュウッド一家との関係は心から感謝しているが、ずっと前から婚約をしていて、数週間後に結婚する。一家に対する敬愛の念と感謝と喜びは感じるが、敬愛の念以上のものを抱くことはありえない、と記してあった。これに対してエリナーは、高潔で繊細な感情の持ち主という外観とは真逆の厚顔無恥で残酷な人間であるとわかったことで、メアリアンの取り返しの付かない最悪の不幸が免れたと最高の喜びを感じる (29, 249-50)。一方、ウィロビーからの返事を待ち焦がれていたメアリアンは睡眠不足に栄養不足、ようやく届いた手紙から、惨めさの苦悶の声を上げ、心身の悶えと戦うことになる (29, 245-61)。

では、ウィロビーの結婚相手はどんな女性なのか。彼女は現代的な垢抜けたお嬢様だが、それほど美人ではない。大金持ちの一家で、50,000ポンドの財産を持つ事実がウィロビーを結婚へ邁進させたのである。ジェニングス夫人も「相当お金に困窮していたらしく破産同然だったようだ。」と彼の派手な生活ぶり語る (30, 265)。

“Fifty thousand pounds, my dear ... . But the family are all rich together. Fifty thousand pounds! (II, 8, 184)

つまり、ウィロビーにとっての結婚は金なのだ。メアリアンとの結婚では洒落た二輪馬車 (curricle カリクル) を乗り回せるはずもなく、獵犬を引き連れて派手な社交ができるわけでもない。メアリアンに対する感情と勘定の不一致から、勘定 (拙者傍点) を優先させ、結果、彼女への愛情を封印したのである。メアリアンは告白されたと思ったことはあった。流れの中で正式な婚約だと勝手に思い込んでいた。つまり、バートンでの二人だけの時間を、厳格な法律上の契約で結ばれていると思い込んでいたのはメアリアンだけだった (29, 254・257)。17歳という若気の至りなのか。ウィロビーの年齢は書かれていない。メアリアンの一途さと思ひ込み、さらには母と姉への相談や報告を無視した結果としか言いようがない。ただ周囲の婚約の噂に対するダッシュウッド夫人の思いや行動は全く描写されていない。ヘンリーは再婚だが、夫人はどうだったかという描写も全くない。階級間の婚姻が当然とされた時代にヘンリーと両家の思惑が優先された結婚だったのである。そんなダッシュウッド夫人にとって、スミス夫人の存在、つまり金銭と階級が最大の関門である。その関門には不安があったが、ウィロビーを信じていたからこそ二人の関係に口をはさむことがなかったのだろう。

失意のメアリアンの周囲には、ブランドン大佐に好機到来と見るジェニングズ夫人がいた。大佐とならメアリアンにとって玉の輿。借金も欠点もない。年収2,000ポンド。デラフォード・パークは快適さと便利さを兼ね備えた古き良き屋敷で、立派な塀で囲まれ、果樹に覆われ、鳩小屋や養魚池、掘割など全てを兼ね備えた邸宅。教会も近く、有料道路<sup>7</sup>も走っている。陽気なジェニング夫人は大佐を称賛する。 (30, 264-65)

It will be all to one a better match for your sister. Two thousand a year without debt or drawback ... . (II, 8, 186)

しかし、ブランドン大佐にも封印したい過去が

あった。以前、バートン滞在時、遠出の日の朝、出発の直前、大佐は一通の手紙を受け取ると理由も語らずロンドンに向かった。大佐は恋の遍歴をエリナーに語る。なぜ、わざわざエリナーに語るのか。メアリアンの今の状況を考えれば、大佐の語ろうとする人物がウィロビーだとするのは容易である。語りは大佐の初恋から始まる。初恋の相手は大佐の父親が後见人だった17歳の姪イライザ (Eliza Williams)。父と兄に無理やり引き離されそうになり、駆け落ちしようとして失敗。当時のブランドン家には多額の借金があり、大佐の父は長男と結婚させようとした。大佐とイライザが愛し合っているのは誰の目にもわかっていた。兄は全く無関心だったが、父が結婚を強要した (pp. 280-81)。東インドへ転属せざるを得なかった大佐は、帰国後に彼女の結婚生活について知る。イライザは相続した財産全てを失い、愛のない結婚で不倫をし、離婚した。ウィリアムズ家の限嗣相続人として長男をイライザと結婚させ、それによって彼女の財産はブランドン大佐の父が横領したといえる。消息不明の中、偶然にもイライザが債務者監獄 (debtors' prison) に収監されていることを突き止めた大佐は、同時に彼女が末期の肺病であることを知る (31, 281-83)。イライザは娘 (Eliza イライザ) をブランドン大佐に託す。しかし、14歳になったイライザは失踪する (p.285)。その相手がウィロビーだった。ちょうど、バートンでメアリアンと出会い、誰もが二人は秘密の婚約をしていると思っていた頃である。しかも失踪した時点で、イライザはウィロビーの子供を身ごもっていた。メアリアンが心底信じるウィロビーは、同時進行で二人の女性を愛し? 捨て? (拙者? 挿入)、結局、金目当てにミス・グレイ (Miss Gray) と結婚する。サー・ジョンもジェニングズ夫人もパーマー夫人 (Mrs. Palmer, ジェニングズ夫人の次女) もウィロビーを「地獄に落ちろ」「悪党」「詐欺師野郎」「縁切り」と罵倒する (32, 294)。

ブランドン大佐の父は家を最重要視する長子限嗣相続制、そして父権制の中で生きてきた人物で

あるからこそ、家と金のために息子に愛のない結婚を強い、妻となったイライザの存在を全く顧みなかったのだ。このブランドン家もジェイン・オースティンの写実によるものであるなら、彼女の周囲に同様な家が存在し、同様に不幸な女性が存在したということになる。

ロンドン滞在終盤、エリナーとメアリアンは宝飾店で義兄のジョン・ダッシュウッドと偶然出会う。「ジェニングズ家もミドルトン家も大金持ち」(p.303) と、ブランドン大佐については「お金持ちか。」「財産はどれくらいか。」「2,000ポンドか、その2倍ならいいね。」(p. 305) と根掘り葉掘り聞くジョンは金の亡者である。

“Who is Colonel Brandon? Is he a man of fortune?”

“Yes; he has very good property in Dorsetshire.”

“I am glad of it. He seems a most gentlemanlike man; and I think, Elinor, I may congratulate you on the prospect of a very respectable establishment in life.” ...

“Two thousand a year;” ... (II, 11, 211)

ジョンの義母一家に金銭的援助を行わない決定は、妻ファニーに屈服したからと思っていたが、実際は夫婦ともに金銭欲が強く、彼にとっての結婚の必須条件も金銭と階級だったのだ。それに、エリナーに「エドワードの結婚が決まりかけているが、母のフェラーズ夫人はエドワードに年収1,000ポンドを与えるらしい。結婚相手はミス・モートンといって故モートン卿 (Lord Morton) の一人娘で30,000ポンドの財産付きだ。」(33, 307) と語る。

“... Mrs. Ferrars, with the utmost liberality, will come forward, and settle on him a thousand a-year, if the match takes place. The lady is the Hon. Miss Morton<sup>8</sup>, only daughter of the late Lord Morton,

with thirty thousand pounds ... ." (II, 11, 212)

しかし、財産なしのルーシーと婚約中のエドワード。この事実に母と姉は金銭を提示しながら必死に説得する。母はミス・モートンと結婚すれば地租を払っても年に1,000ポンドの収入になるノーフォーク州 (Norfolk) の土地を分与するが、貧乏なルーシーとの結婚を強行するなら、現在エドワードが持っている2,000ポンドだけで、援助は絶つと脅かす (37, 363)。

His mother explained to him her liberal designs, in case of his marrying Miss Morton; told him that she would settle on him the Norfolk estate, which, clear land-tax, brings in a good thousand a-year; offered even, when matters grew desperate to make it twelve hundred; and in opposition to this, if he still persisted in this low connection, represented to him the certain penury that must attend the match. His own two thousand pounds she protested should be his all; ... . (III, 1, 249)

「現在持っている2,000ポンド」とはどういうことか。フェラーズ氏は既に亡くなり、当然エドワードが長子限嗣相続者として遺産相続は完了しているはずだが。

さて、エドワードがミス・モートンと結婚するなら3カ月以内に2,500ポンドの年収が入り込む。ミス・モートンが30,000ポンドの財産付きだから (37, 365)。しかも、“the Hon. Miss Morton” という紹介から、彼女は貴族階級である。夫人も姉のファニーにも“Mrs.”がついているので貴族階級とは考えられない。ミス・モートンとの結婚話が本当に進行中なのか。単なる紹介程度で、金銭欲の強い人間の思い込みではないのか。

The interest of two thousand pounds

---how can a man live on it! --- and when to that is added the recollection, that he might, but for his own folly, within three months have been in the receipt of two thousand, five hundred a-year, (for Miss Morton has thirty thousand pounds,) ...

(III, 1, 251)

援助という餌に対しても固辞し続けるエドワードに業を煮やしたフェラーズ夫人は、彼に譲る予定のノーフォーク州の土地を次男のロバートに分与すると正式に決める (37, 366)。本来なら長子限嗣相続者のエドワードが受け継いだはずのものを次男のロバートに相続させるということは、ノーフォーク州の土地はフェラーズ夫人が実家から遺贈されたのか。エドワードが「現在持っている2,000ポンド」とともにフェラーズ家の遺産相続は理解しがたいほど複雑である。フェラーズ家の遺産相続をジェイン・オースティンが自ら見聞きした事例によるものと考え、当時のイギリスで長子限嗣相続が必ずしも厳格に行われていなかったのかと考えさせられもする。

ところで、エドワードを好青年だとする大佐は、自領の空席のデラフォードの聖職禄<sup>9</sup>に彼を推挙する。大佐はデラフォード教区の大地主として聖職禄、つまり教会職に就き、教会財産から一定の収益を受ける権利とそれによる収入の推挙権を持っていた。わずか年収200ポンド程ではあるが、何かしらの助けになるだろうという博愛精神と友情から出た行動である (39, 385-87)。

I believe, did not make more than 200l.<sup>10</sup> per annum, ... (III, 3, 264)

エドワードがエリナーへの想いを押し殺し、ルーシーとの結婚を果たすため苦しみもがく間に、フェラーズ家の長男の座を奪ったロバートは、軽佻浮薄で自己満足を絵に描いたような男である。大佐の提案した200ポンドの聖職禄を少額すぎると笑いこける。さらに、ロバートは兄と

ルーシーの婚約を知ると、「上流社会から永遠に追放だ、兄貴もおしまいだ」と言い放つ(41, 408-09)。ミス・モートンとの結婚話を鑑みるとフェラーズ家はアッパー・クラスなのかもしれない。その一員のロバートが語るルーシー評は野暮ったい田舎娘で、品もなく、洗練されてもいない、美人でもない。当然ながら自分の相手には相応しくないし、フェラーズ家にとっては範疇外(41, 410)と一刀両断する。

そんな中、ロンドン社交界に疲れ切ったエリナーとメアリアンは、ようやくバートンに戻る。長旅の途中、ジェニングズ夫人の娘のパーマー宅で、メアリアンは高熱で臥してしまう。病状は一進一退を繰り返しながらも悪くなる一方で、熱に浮かされ、脈も弱く速く、興奮して母を呼ぶ。ついにバートンへ母を迎えに行くことになり、ブランドン大佐が率先してその役を引き受ける(43, 425)。母の到着が間に合うか心配なほどメアリアンの病状は深刻だった。意識の混濁、息遣い、肌の色、唇の色、全てが回復の兆候を示し始め安定した眠りができるようになったころ(43, 430)馬車が到着し、酔ったウィロビーが降りてきた。

ウィロビーは単に楽しく過ごそうと思いメアリアンと交際した。彼女の幸福など考えてもみなかった。自分の感情の趣くままに楽しんだ。ただただ好かれようとした。成人になる前から財産もないのに金遣いが荒く、収入の多い連中と付き合った。借金もかさみ財産のある女性との結婚を考えていた。自分勝手な虚栄心を満たすために、人を愛するということがわかっていなかった。貧乏をしたくないために金持ちの女性と結婚して、幸福に繋がる全てのものを失ってしまった。メアリアンに愛されて一緒に暮らせば、貧乏なんか怖くもなかったのに。彼女と過ごした時間が、生涯で最高に幸せな時だった。プロポーズしようと決心してからも、経済状況が最悪だったので踏み切れなかった(44, 440)と、自己弁護する。彼の語る「財産もない」からウィロビー家の長子ではないのは明白だ。次男以下の存在であったことに嫌

気がさし放蕩生活を送ったのだろう。それがメアリアンの愛を持って遊び、今になって後悔の念に駆られているのだ。

一方、イライザ・ウィリアムズ(Eliza Williams, ブランドン大佐の愛したイライザの娘)の件がミス夫人の耳に入り、イライザと結婚すれば過去の過ちは赦すと言ってもらえたにもかかわらずできなかった(44, 442-43)。結局、自ら冷酷非情な卑劣漢(44, 445)だと語るウィロビーは、自分の金銭欲でイライザとメアリアンの愛を自ら壊してしまった。今ようやく、メアリアンに対する愛が真実だと気づき、ソフィア(Sophia, Miss Grey ミス・グレイ)との結婚生活は癒しようのない不幸の源(44, 456)になろうとしていた。

新たな展開が始まる。ダッシュウッド夫人は大佐の真剣で優しい、変わらぬ思いを打ち明けられていた(45, 463)。ウィロビーとの関係を知りながらもメアリアンを愛し続けた大佐との結婚を望む夫人の「誰だって財産が気になるもの。でも大佐の財産を知りたいとも思わない」(45, 467)“His fortune too! --- for at my time of life, you know, everybody cares about that, and though I neither know, nor desire to know, ...” (III, 11, 316)こそが、ダッシュウッド家の結婚観である。

病み上がりのメアリアンは母と姉とともに大佐の馬車でバートンへの帰路につく(46, 469)。最初こそ思い出が浮かんだようだが、ウィロビーを悪人としなければ心の平和を保つことができ、最初から騙していたとするなら、自分は非常に恥ずかしい軽率なことをした馬鹿としか言いようがないが、そうは思いたくない、とメアリアンは心に決め(46, 475)、死線を彷徨ったことで、真剣に自分を振り返る時間と心の安寧を得た。彼と知り合った頃を思い出すと、自分の無分別と他人への思いやりのなさを痛感し、心の持ち方が不幸を呼び、それに耐える力の欠如で命を落とすところだったと自戒する。神や家族への償いをする時間が欲しいという強い気持ちが沸き上がってくると同時に、自分に一番必要なものは、耐えたエリナーの自制心と分別である(46, 476-77)と理解

する。思い出は簡単には消えないが、信仰と理性と努力によって抑えることはできるとメアリアンは語る (46, 478)。そしてついに「私の幸福が彼の目標だったことは一度もない」(47, 484) と言い切る。

突然、新たな事実がもたらされる。ダッシュウッド家の下男がエドワードの結婚を報告する (47, 487)。エリナーは当然だが、メアリアンと母も落胆する。特に、メアリアンのことばかり心配し、エリナーとエドワードとの関係に無関心であった母は、娘の静かに耐え忍んでいる苦しみに気付かなかったと後悔する (47, 491)。ダッシュウッド夫人は家計という金銭問題にも疎いが、娘の心情を察する能力にも問題がある。エドワードの結婚の過程を知りたくて仕方なかった一家の前に、バートン・コテッジに向かってくる男性の姿が見えた。エドワードだった。双方ともに時候の挨拶をするのがやっとで、「フェラーズ夫人はお元気ですか」に対し、会話が噛み合わない。ようやく事実が判明した。フェラーズ夫人とはロバートの妻。しかもエドワードと秘密の婚約をし、勘当に追い込んだ張本人のルーシーだった (48, 496-97)。これでエドワードとエリナーの婚約は整い、理性的かつ客観的に世界一幸福な男になった (49, 498)。彼はルーシーとの幼稚な初恋と軽率な婚約を「愚かさと怠惰」(49, 499) と語る。

ところで、エドワードとエリナーの結婚生活の原資はエドワードの2,000ポンドとエリナーの1,000ポンド、そしてブランドン大佐からのデラフォードの聖職禄と利子の350ポンド。これでは安定した生活を送ることは無理である (49, 510)。

Edward had two thousand pounds, and Elinor one, which, with Delaford living, was all that they could call their own, ... three hundred and fifty pounds a-year would supply them with the comfort of life. (Ⅲ, 3, 343)

フェラーズ夫人はエドワードの結婚報告に対

し、ミス・モートンとなら貴族の娘だし30,000ポンドの財産を持っているが、エリナーは紳士<sup>11</sup>の娘で3,000ポンドしか持っていないと不満である。ここに至ってもフェラーズ夫人は階級と金銭に執着し、エドワードにファニーと同額の10,000ポンドを提示し、エドワードから乗り換えたルーシーと結婚する次男のロバートに年収1,000ポンドを約束し、最終的に長男のエドワードはわずか年収250ポンドで決着となった。(50, 517)。

Miss Morton was the daughter of a nobleman with thirty thousand pounds, while Miss Dashwood was only the daughter of a private gentleman, with no more than *three*, ... (Ⅲ, 14, 347)

Robert was inevitably endowed with a thousand pounds a-year, nor was anything promised either for the present or in future, beyond the ten thousand pounds, which had been given with Fanny. (Ⅲ, 14, 348)

エリナーとエドワード、メアリアンとブランドン大佐の結婚から、愛ある結婚が金銭に勝利して物語は終わる。

『分別と多感』、つまり、「分別」のエリナーと「多感」のメアリアンの終着点は結婚であるが、そこに至るまでの金銭と階級描写の明快さ・明白さもジェイン・オースティンの写実によるのである。

## V. 200年を経て

『分別と多感』が「エリナーとメアリアン」を書き直したという事実と、18世紀末の社会における金銭に関しても写実であるという仮定の下、金銭描写に視点を当て追ってきた。ここからは現在の貨幣価値<sup>12</sup>を併記しながら考察を続ける。

### 5-1. ダッシュウッド家の遺産相続

ノーランド・パーク全ての所有地と屋敷の法定相続人であるヘンリーから妻と3姉妹への遺産

は7,000ポンド(£447,479.87, ¥81,653,657)であった。ノーランドにノーランド・パークを有するダッシュウッド家の限嗣相続の金額としては、8,000万円は驚くほど少額であるが、長子限嗣相続で長男のジョンにどのくらい相続されたかについての描出がないので、ダッシュウッド家の総資産はわからない。

先代の遺産相続時には、甥ヘンリーの娘の3姉妹にそれぞれ1,000ポンド(£63,925.70, ¥11,663,664)を遺贈した。この3,000ポンド(£191,777.09, ¥34,989,231)は先代が限嗣相続後に何らかの方法で増やしたものの一部と思われる。その折にも先代の総資産は描かれていない。

一方、ジョンは父からの相続の中から3姉妹に1,000ポンドずつの贈与案を妻フェニーに示すが、彼女は長子限嗣相続者、つまり長男ハリーへの相続を念頭に拒否する。その根拠は、ダッシュウッド夫人一家がヘンリーの遺産7,000ポンドの利子で裕福な暮らしができること。先代からの一人頭1,000ポンド遺贈による利子が月50ポンド(£3,196.28, ¥583,145)で、年に600ポンド(£38,355.42, ¥6,997,636)の収入になること。これらからジョンは時々50ポンドを義母一家に与えることにした。3姉妹であることから、その3倍のおよそ1,800万円ということになる。利子については明白ではないが、ヘンリーからの遺産7000ポンドを考慮すると、9,000万円近くになり、物語中でのダッシュウッド夫人一家が単なる「紳士」の家の財産としてはかなりの金額である。

### 5-2. ジョン・ダッシュウッド

ジョン・ダッシュウッドの行動や発言、つまり人間観察は金銭が基本である。例えばブランドン大佐の年収を気にする。「2,000ポンド(£127,851.39, ¥23,414,321)か、その2倍あればいい。」「ジェニングズ家もミドルトン家も大金持ち。」義弟エドワードの結婚話に関しても、「フェラーズ夫人はエドワードに年収1,000ポンド(£63,925.70, ¥11,707,161)を与えるらしい。」「ミス・モートンは故モートン卿(the late Lord Morton)の一人娘

で30,000ポンド(£1,917,770,891, ¥351,214,820)の財産付き」などと語る。ミス・モートンがエドワードと結婚し男子が誕生すれば、その子供がモートン家の長子限嗣相続者になる確率は非常に高い。これにより、義兄としてのジョンと息子ハリーのダッシュウッド家と、妻の実家フェラーズ家の双方が階級においても金銭においても誇れる家になると信じているようだ。このミス・モートンとの結婚話は、ジェイン・オースティンの3番目の兄のエドワードが裕福な家の養子となっていたことがヒントになったと考えられる。

### 5-3. ダッシュウッド夫人一家

ダッシュウッド夫人はバートン・コテッジの修繕と増改築計画も覚束ないほど金銭感覚が乏しい。また、17歳の次女メアリアンの語る結婚の条件は、「年収1,800ポンド(£115,066.25, ¥20,992,906)から2,000ポンド(£127,851.39, ¥23,366,699)で、その根拠は、召使が数名、馬車が1台か2台、数匹の猟犬である。つまり、2,000ポンドでも控えめ、それ以下では到底無理ということになる。一方、「分別」の姉、19歳のエリナーは1,000ポンド(£63,925.70, ¥16,683,350)と提示する。わずか2歳しか変わらない姉妹のこの金銭感覚の差はいったい何なのか。それこそジェイン・オースティンが生きた時代、つまり理性から感情重視を「分別」のエリナー、「多感」のメアリアンという姉妹を主人公とした彼女の小説家としての時代を写実、揶揄する力量による人物設定である。ただ、姉妹それぞれの提示した約1,700万から2,300万円は、「分別」と「多感」の姉妹であっても、想像を超える金額である。

ところで、ジェイン・オースティンの時代は家父長制が徐々に薄れ、結婚に関しても両親主導型から配偶者選択型への移行時期だったとされる。しかし、貴族やそれに続く上位階級では両親の意向で配偶者を決定することが多かったのも事実で、根本には金銭が存在する(白木, p.149)。17歳のメアリアンの結婚願望は、時代の先端の自由恋愛を取りながらも、育った環境から金銭を主

眼とする両親主導型が根底にあるようだ。

### 5-3. ウィロビー

見栄えの悪い部屋も200ポンド (£12,785.14, ¥23,382,515) もかければイングランド有数の夏の部屋になる原資はどこからか。経済的に独立し年6,700ポンド (£38,355.14 ないし £44,747.99, ¥7,022,244 ないし ¥8,195,013) くらいの地代収入を得ているので、既に200ポンド程度は貯まっているからこそその改築案だろう。地代は800万程度だが、ウィロビーがどのような職についているかの描出はされていない。しかし、経済的に独立しており、結婚話も上がっていることから、紳士以上の職に就いていると想像できる。

ところで、ウィロビー家はすでに相続が完了し、彼は長子ではなく、遺贈の形で地代収入が入っているのだろう。また、彼がミス・グレイと結婚する旨の承諾をスミス夫人に受けることから、スミス夫人の相続対象者の中では一番上位の男子、つまりスミス家の限嗣相続者と捉えることができる。

その結婚相手は大金持ちの娘で50,000 (£3,196,284.82, ¥585,358,040) ポンドの財産を持つ。50,000ポンドを相続したのだろうが、女性が相続するということは考えにくい時代であったので、彼女が結婚した時点で約6億円は結婚相手の所有となる確率が極めて高い。万一、単なる遺贈、贈与、持参金としたら驚愕の金額で階級も貴族階級と想像できる。そのような階級とウィロビーそしてスミス夫人が婚姻関係を結ぶことができるのであればウィロビー家、スミス家ともに完全なるアッパー・クラスといえる。

### 5-5. エドワードと母フェラーズ夫人

ルーシーの2,000ポンド (£127,851.39, ¥23,414,321) の出所も家族構成も描かれていない。フェラーズ夫人はミス・モートンと結婚すれば、年に1,000ポンド (£63,925.70, ¥11,707,161) の収入になるノーフォーク州 (Norfolk) の土地を分与するが、貧乏なルーシーとの結婚を強行するなら、現在エ

ドワードが持っている2,000ポンドだけで、援助は絶つと説得する。見かねたブランドン大佐が聖職禄の推挙をするが、年収200ポンド (£12,785.14, ¥2,341,432) では生活は厳しい。因みに、フェラーズ家の本拠地も、エドワードの2,000ポンドの根拠も不明。さらにノーフォークの土地が実家からの分与か、フェラーズ氏の遺産によるものかも不明である。

ところで、ジェイン・オースティンの写真からすると、つまり『分別と多感』に登場する地名のほとんどは、彼女あるいは家族が一時期過ごした土地に限られており、北海に面する中部イングランドのノーフォークにジェイン・オースティンが過ごしたとは考えにくい。ただ、5兄のフランシスと弟のチャールズが海軍に所属していたので、オースティン家と同様牧師の息子ネルソン提督 (Horatio Nelson 1758-1805) を崇拜し、彼の出身地ノーフォークを登場させたと考えられる。

フェラーズ家の総資産額や家系、階級は描出されていないが、ミス・モートンとの縁談話から、物語の中では最上位に属す家かもしれない。「公爵」(the Duke) 以外の世襲貴族は「卿」(Lord) と紹介されるからである。エドワードとミス・モートンが結婚すれば、夫人は息子を政治家に、そして階級と金銭的欲望が達成できる。逆に、紳士の娘エリナーとなら、エドワードの2,000ポンドとエリナーの1,000ポンド、そして聖職禄と利子の350ポンド (£22,373.99, ¥4,098,915) に過ぎず、合計約4,000万円にすぎず、母の夢は崩れ落ちることになる。

階級と金銭に執着するフェラーズ夫人が、長男の秘密の婚約者で「無一文」(37, 353) のルーシーとロバートの結婚を許したこと。さらにエドワードにわずか10,000ポンド (£639,256.96, ¥117,087,370) しか、(1億円超えではあるが) 与えなかったことは不可解である。言葉巧みに祭り上げるルーシーの罠に嵌まったのか。いずれにしろ、この親子フェラーズ夫人とエドワードは対照的な人物として、そして彼とエリナーは「分別」の人として描かれている。

## VI. まとめ

ジェイン・オースティンの写実の素晴らしさは、夏目漱石評以外にもイギリス文学関係者の間では常識である。そして200年たった今、彼女は紙幣の顔になっている。今回、『分別と多感』に描出されている人間模様の原点ともいえる金銭と階級に焦点をあてて検証した。つまり、『分別と多感』の写実が時代と社会を映し出していると認識しながら読むことで、ジョージ3世治世時、つまり後のジョージ4世の摂政就任以前の1790年代の階級社会の結婚を金銭に絡めて理解できるところから検証を始めた。特に、提示されている19世紀初頭のポンドを21世紀のポンドと円に換算できたことで、想像するしかなかった金銭と階級との関係性がより明確になった。結果、金銭と階級にまつわる人物描写は18世紀最後のイギリスの社会通念といえる。

一方、エドワードをフェラーズ家の長子限嗣相続者から外し、次男のロバートへという変更には疑問しかない。本来、直系卑属、特に長男優先の長子限嗣相続がなされていたはずである。なぜこのような展開になったのか、彼女が人生のほとんどを過ごしたイングランド南部で長子限嗣相続が必ず行われてはいなかった、長子限嗣相続に関わる様々な噂を聞いていた、と考えざるを得ない。であるなら、それはまた彼女の写実で、つまり、狭い世界で生きたジェイン・オースティンの人生から生み出た写実である。しかし、彼女は紙幣の顔である。

## 注

1. 日本語訳と要約は『分別と多感』中野康司訳を参考。引用部分は、括弧内に章、ページの順に示す。
2. 英文引用は *Sense and Sensibility*, Jane Austen, London: Penguin Books, 2003. 主に金銭に関してのみ引用。括弧内に巻、章、ページの順に示す。
3. ジェイン・オースティンが購読可能な地方紙に、Bath Chronicle and Weekly Gazette (1749-1910) と Cheltenham Chronicle (1809-1950) が挙げられる。居住経験のあるバース (Bath)。地理的にチェルトナム (Cheltenham) がコッツウォルズ (Cotswolds) と隣接し、コッツウォルズがサマセット州 (Somerset) に跨り、彼女の行動範囲のレディング (Reading) に近いこと。オースティン家は『タイムズ』を購読していただろう。
4. 白木の「貴族の子供と地方地主層以上の階級の相続者の初婚年齢の中央値」1755-99の図2において男性26歳、女性22歳と読み取れる (p.150)。17世紀後半を境に初婚年齢が早まっているが、相続問題を抱えることの多い地主階級の子供の結婚は、両親が干渉してくる傾向が根強く残ったため (p.151) 中央値を押し上げている。
5. 「相続するらしい」ウィロビーは「限嗣相続」対象者と考えられる。新井 (p.78) によると、「限嗣相続」とは相続する息子がいない場合、最も近い男性の親族に相続を限定する制度で、土地や財産が分けられることが避けられ小さくなっていくことを防ぐことができた。
6. 1801年に Two-Penny Posts の市内サービス区間が3マイルに縮小され、すべての手紙が2ペンスになった。
7. 「ターンパイク」(turnpike) と呼ばれ、1750年までにイングランドの大部分の大型四輪の駅馬車に適した有料道路。広大な土地所有者のアップパー・クラスにとって、有料道路を通すことで通行料金を徴収できた。(松原 p.353)
8. Hon = Honourable 子爵および男爵 (一代貴族を含む) の息子および娘の敬称。
9. 「聖職禄」は、牧師の職+財産 (10分の1税による収入および牧師館への居住権)。非世襲で、牧師を任命する聖職禄推挙権者が所有し、推挙権者は大地主が一般的。
10. l は 'libra' を示し、リブラが£, ソリドゥス (s.) がシリング, デナリウス (d.) がペニー (ペンス)。12ペンス=1シリング, 240ペンス=20シリング, 20シリング=1ポンド。
11. ジョージ3世治世下 (オースティンの時代)、次男以下の貴族の親戚も紳士と呼称。つまり、貴族の下の階級でアップパー・クラスの最下位に位置し、爵位があれば貴族、なければ地主階級。アップパー・クラスの次男以下はアップパー・ミドル・クラス。紳士に分類される職業には、英国国教会牧師、法廷弁護士、陸・海軍士官、内科医が該当。パブリック・スクール、オックス・ブリッジ (Oxford, Cambridge) 出身者が大多数。
12. 拙論中のポンドは2023年7月1日に、イングランド銀行 Inflation Calculator, Bank of England より換算。物語中の£は1811年1月23日のものと

して換算. Inflation Calculator で、各月23日が提示されており、『分別と多感』の1811年秋の出版までの期間を考慮. なお、円換算は2023年7月2日. 拙論では、物語での£, 現在の£, 現在の円の順に提示.

#### 参考文献

- Adkins, Roy and Lesley. *Jane Austen's England – Daily Life in the Georgian and Regency Periods*. New York: Penguin Books, 2014.
- 新井潤美 『ノブレス・オブリージュ イギリスの上流階級』, 白水社, 2022.
- Austen, Jane. *Sense and Sensibility*, London: Penguin Books, 2003. (中野康司訳『分別と多感』, ちくま文庫, 2012)
- Chitham, Edward. “Transportation and Travelling”. In Thonmälén, Marianne ed. *The Brontës in Context*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012. (松原典子訳「交通機関と旅」内田能嗣・海老根宏監修『歴史のなかのブロンテ』, 大阪教育図書, 2015.)
- Cincinnati, Hughes Kristine. *The Writer's Guide to Everyday Life in Regency and Victorian England* Ohio, Writer's Digest Books, 1898. (『19世紀イギリスの日常生活』植松靖夫 訳 松柏社, 1999.)
- 大英図書館所蔵英国新聞コレクション: 第4部1732–1950年  
<https://www.gale.com/jp/c/british-library-newspapers-part-iv> (2023年5月6日検索)
- 平山健二郎「19世紀イギリスにおける貨幣理論の発展」*The Development of Monetary Theory in 19<sup>th</sup> Century Britain*, 『経済学論究』関西学院大学, 2006.
- Hughes, Kristine. *The Writer's Guide to Everyday Life in Regency and Victorian England*, Ohio, Writer's Digest Books, 1898. (『19世紀イギリスの日常生活』植松靖夫 訳, 松柏社, 1999.)
- Inflation Calculator, Bank of England,  
<https://www.bankofengland.co.uk/moreary-policy/inflation/inflation-calculator> (2023年7月1日検索)
- 川口能久『個人と社会の相克—ジェイン・オースティンの小説』南雲堂, 2011.
- Kohm, Marie Lynne and Akers, E. Kathleen. *Law and Economics in Jane Austen*, Lexington Books, 2020.
- 小山廣和「十九世紀イギリス憲法下の「圧政」と「課税」—ダイシーの憲法論と「アイルランド問題」, 「課税」論・税財政論を軸に」, 『法律論叢』, 74巻, 4・5合併号, 2002.
- MacDonagh, Oliver. *Jane Austen – Real and Imagined Worlds*, New Haven & London: Yale University Press, 1991.
- 松本啓『ジェイン・オースティンの世界』近代文藝社, 2011.
- 三菱UFJ信託銀行「新しくお札に印刷される人物3人と過去に印刷された人物を紹介!」<https://magazine.tr.mufg.jp/90051> (2023年6月30日検索)
- 村岡健次・川北稔編『イギリス近代史』ミネルヴァ書房, 2003.
- 中野康司『ジェイン・オースティンの言葉』筑摩書房, 2012.
- 夏目漱石『文学論二』講談社学術文庫, 昭和54年, 1979. ———『漱石全集』第18巻, 岩波書店, 1979.
- Poplawski, Paul. *A Jane Austen Encyclopedia*, Westport: Greenwood Press, 1998. (向井秀忠 監訳『ジェイン・オースティン事典』, 鷹書房弓プレス, 2003.)
- Said, W. Edward. *Culture and Imperialism*, New York: Vintage Books, A Division of Random House, 1994. (『文化と帝国主義 1』大橋陽一訳 みすず書房, 2006.)
- Shields, Carol. *Jane Austen, A Life*, A Lipper/Penguin Book, 2001. (『ジェイン・オースティンの生涯』内田能嗣・惣谷美智子監訳 世界思想社, 2009.)
- 白木歩澄「十八世紀イングランドにおける女性の結婚観—ハードウィック婚礼法制史による変化—」, 『歴史研究』, 64号, 愛知教育大学歴史学会, 2018.
- Todd, Janet. *Jane Austen – Her life, Her Times, Her Novels*, London: Andre Deutsch, 2013.
- Trevelyan, George Macaulay. *English Social History: A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria*, London: Longman, 1944. (『イギリス社会史 2』松浦高嶺・今井宏訳 みすず書房, 2000.)
- Vickery, Amanda. *The Gentleman's Daughter – Women's Lives in Georgian England*, New Haven and London: Yale University Press, 1999.
- Ward, Ian. “Law”. In Thonmälén, Marianne ed. *The Brontës in Context*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012 (馬渕惠理訳「法律」内田能嗣・海老根宏監修『歴史のなかのブロンテ』, 大阪教育図書, 2015.)